

## 《海外研究室事情 (48)》

## Max-Planck-Institute for Astrophysics (MPA)

マックスプランク研究所 宇宙物理部門

<http://www.MPA-Garching.MPG.DE/>

**S**imon が帰ってくる！ 出張の多いボスの帰還を前に、我々ポストドクたちは戦々恐々としています。私が所属するのはマックスプランク研究所宇宙物理部門 (MPA) にある三つの大きなグループの一つ、Simon D. M. White 率いる宇宙論グループです。あとの二つは R. Sunyaev の高エネルギーグループと W. Hillebrandt の超新星グループ。我がグループは総勢約 30 名、うちスタッフ 5 名、ポストドク 13 名、学生 11 名と、ポストドク以上が 3 分の 2 を占める実働部隊です。マックスプランクはドイツの準国立研究所ですが、ドイツ人は 10 名そこそこ、次に多いのはイタリア人の 5 名、英米中が 2 名ずつ、あとはフランス、オランダ、ポーランド、ノルウェー、アルゼンチン、そして日本、まさに多国籍軍です。そしてもう一つ、集合写真をみれば一目瞭然、女性が約 3 割を占めます。

研究分野は、銀河形成、構造形成、宇宙再電離、背景輻射など、銀河スケール以上のことなら何でも扱っています。Simon White は観測の細かいこ

とから相対論や素粒子まで、何でもつっこむのでボスとしておそれられています。グループには、GADGET という N 体 SPH コードを開発した V. Springel を代表とする計算おたくはもちろん、GADGET によるシミュレーション結果を使った理論的研究をする人、G. Kauffmann, S. Charlot を筆頭に Sloan Digital Sky Survey のデータを使った観測的研究をする人、実際に観測をしているポストドクもいます。理論家としては観測家が近くにいるのは良いことで、最新の観測の話もどこが怪しいとかいう裏話もきけます。私は主にシミュレーションによる楕円銀河の研究をしているので、さらに隣の南ヨーロッパ天文台 (ESO) には A. Renzini、隣の宇宙望遠鏡部門 (MPE) には R. Bender と、熱烈楕円銀河党(?)の代表格が近くにいて最高の研究環境にあります。研究内容は自由で義務はとくになく、私は日本でやっていた研究も続けていますが、投稿前にはボスのこわいチェックときつーいコメントをくぐり抜けなければなりません。こちらでの共同研究はポストドク同



中央が S. D. M. White, 左手前が G. Kauffmann, 右手前が筆者。左の方からポストドクは C. Möller, V. Springel, S. Zaroubi, T. Banday, F. Miniati, B. Ciardi, F. van den Bosch, P. Popowski, G. Rudnick, S. A. Cora。2003 年 6 月、緑に囲まれた研究所屋上にて。

士で勝手に進めていて、ボスからまたきついコメントとせっかちすぎる催促を日々受けています…….

毎朝 11 時にコーヒータイムがあり、一仕事終了の人々が集って、議論したり雑談したりボスの尋問を受けたりします。ランチは 12 時半、敷地内のカフェテリアで肉芋こってりドイツ料理、朝の尋問をすり抜けてもここで捕まります。セミナーは週に 3 回、月曜は研究所全体のややフォーマルなセミナー、火曜は宇宙論グループのセミナーで質問大攻勢、木曜は ESO との共同コロキウムで世界各国の先生方の話がきけます。訪問者も多く、人と議論する機会には事欠きません。こちらの人々の仕事の能率は非常に良く、朝からばりばり働いて夕方 5 時にはさーっと帰宅します。これは見習わなければなりません。土日に働いているのはほんの少数、季節ごとに 1~2 週間の長期休暇を取ることも可能です。何であんなに休んでいて仕事ができるのか、私は不思議でなりません。

ただ計算機環境は、他の国から来た人々はいいいとっていますが、日本（東京大学と国立天文台）に比べると格段に悪いのが私には不満です。隣の計算センターにスーパーコンピューターも Linux クラスタもあります、いつも順番待ちでなかなかジョブが走り出しません。

研究所があるのはドイツ第三の都市ミュンヘン、と偽っておきますが、正しくは 15 km 北にあるガルヒンという田舎町で、道端には畑が続き、リスやハリネズミも出没します。町中からはバスと地下鉄を乗り継いで約 30 分、バスは土曜は 4 時まで、日曜はないのが不便です。2006 年には地下鉄で直結される予定で今はゆっくりと工事中です。

ミュンヘンは観光地としても有名で、町中いたるところ博物館・美術館だらけ、オペラ座（バイエルン国立歌劇場）は世界屈指、日本人観光客いっぱい、かの有名なノイシュバンシュタイン城やドイツアルプス、オーストリアのザルツブルグ

へは車で 2 時間、チューリッヒは 3 時間半、パリやミラノも電車で一晩 10 時間の、ヨーロッパを満喫するには最高の場所といえるでしょう。去年から成田直行便もでき便利になりました。古い建物を活かしたコンパクトな町並と、その外側には緑が広がり、ヨーロッパとは豊かなところです。人口密度が低く、天災もなく、湿度が低く、物が朽ちず、焦りを感じない……、日本との違いを思います。ここに日本の密度と速度と繊細さと根性を持ち込めば、きっと素晴らしい研究ができるはずです。

このポストドク連中にはヘンな人が多いです。月に一度、posdoc outing というイベントがあって、世界最大のビール祭りオクトーバーフェストで机にあがって踊り狂ったり、近くの池でバーベキューパーティをして夜中に泳ぎまくったり、トラムという路面電車を借り切って町中を走りながらビール三昧のどんちゃん騒ぎをしたり、とんでもない遊びばかりしています。そんな彼らは研究に関してもアクティブで実際優秀で、セミナーをやれば発表者よりも多く喋っているし、日々つこんだ議論をし合っています。

日本はやはり辺境、人と情報に囲まれるという点でこちらの研究環境は素晴らしく、若いうちにこのような経験ができてとてもよかったと思います。それに周りの仲間たちは将来、世界各地で偉くなりそうで、貴重な人脈を手にしたも同然なわけです。私にとっては初めての海外生活で最初は大変でしたが、一年が過ぎた頃からようやく慣れて自分のペースがつかめてきて、仲間ともうち解けて、つたない英語でも気持ちを察してくれるようになって、今は毎日がとても楽しいです。

私はここに公募できました。毎年 1 月始めが締切で、120 から 180 の応募があり、数人が採用されるようです。ほかにもいくつか財源はあり、詳しくはホームページを見てください。

小林千晶（マックスプランク研究所）